高知女子大学看護学会誌　VOL.OL..41, NO. 2 , pp70～79　2016

研究報告

低出生体重児を抱える母親のMaternal Confidenceおよび Maternal Confidenceを育成する看護介入に関する文献検討

Literature Review of Maternal Confidence in Mothers with Low Birth Weight Infants and the Nursing Intervention to promote for Maternal Confidence

岩　﨑　順　子（Junko　Iwasaki）*　　野　嶋　佐由美（Sayumi　Nojima）*

要　　約

近年、周産期医療の発達に伴い低出生体重児や未熟児の出生率は年々増加してきており、リスクを抱える母親に対する支援が重要な課題となっている。そこで本研究では、低出生体重児を抱える母親のMaternal ConfidenceおよびMaternal Confidenceを育成する看護介入に関して文献検討をおこなった。低出生体重児を抱える母親は、［低出生体重児の出産・育児といった予期せぬ体験］［母親の自責・罪悪感］［子どもの不確かさ］［子どもの成長への喜び］［アンビバレントな母親の思い］といった体験をしていた。また、低出生体重児を抱える母親のMaternal Confidenceを高めていく看護介入として、【子どもの健康の保持・増進】【子どもとの生活に関する知識】【子どもとの生活に関する行動】【子どもの理解に関する感受性】【子どもとの生活に関するマネージメント】の各局面における看護介入が明らかとなった。今後、更に低出生体重児を抱える母親の特徴に応じた具体的で広く活用できるMaternal Confidenceを高める看護介入の開発が望まれる。

キーワード：Maternal Confidence　低出生体重児　看護介入

Ⅰ．は　じ　め　に

我が国における総出生数に対する低出生体重児の占める割合は2013年、男児8.6％、女児10.8％[1]と増加の一途をたどっており、平均出生時体重は年々減少傾向にあることからも、低出生体重児の出生が増えている。正常出生体重児の母親と比較し、極低出生体重児の母親では育児上の問題を抱える者が多く、特に子どもの発育や発達、しつけなどに困難感を訴え、育児困難を感じる母親・家族が多いことが報告されている[2)3)]。一方、周産期医療の発達に伴い、高齢出産や不妊治療、ハイリスク妊娠の増加に伴う帝王切開の割合が増加したこと等により低出生体重児や未熟児の出生率は年々増加してきており、リスクを抱える母親に対する支援は重要な課題である。

妊娠・出産・育児に関する研究は、従来、母性性や母性意識という母親に焦点を当てた研究が蓄積されてきたが、近年Maternal Confidenceが母親となる過程に深く関与しているとして注目されている。Maternal Confidenceは、母親になる過程は学習や経験により導かれるものとして注目しており、母親になることが、先天的な要因ではなく、妊娠・出産・育児といった過程で獲得されるという理論的な根拠となっている。Maternal Confidenceは、母親が母親としての行動を行うにあたって自分が行動をとる能力があるとする、主観的なとらえとして母親になる過程を導くための重要な概念である。

そこで本論文では、低出生体重児を抱える母親のMaternal Confidenceおよび Maternal Confidenceを育成する看護介入に関する文献検討をおこない、低出生体重児を抱える母親のMaternal Confidenceを育成する看護介入についての示唆を得ることを目的に文献検討をおこな

*高知県立大学看護学部

う。文献検索は「低出生体重」「Maternal Confidence」「看護」をキーワードに1994～2014年までの期間、文献検索をおこなった。国内の文献については、医学中央雑誌を用いて「低出生体重児」「看護」をキーワードとして検索し、更に看護文献、原著論文で絞り込み、Maternal Confidenceに関連する論文を抽出し550文献を抽出し、そのうち64文献を対象文献とした。海外の文献についてはCINAHLを用いて「Maternal Confidence」「LBW; low-birth-weight infant」をキーワードとして７文献をとりあげた。

Ⅱ．Maternal Confidenceに関する理論・概念定義についての文献検討

１．Maternal Confidenceの定義

Maternal Confidenceの概念は、先行研究において明らかとした[4]。Maternal Confidenceの考え方は、Rubinの理論およびHillの役割能力[4)~6)]の理論およびSelf-Efficacyの理論的背景により定義されている。Self-Efficacyの理論では、人間の行動形成には自己効力感が強く関連しているとして、自己効力感と行動の両方が、お互いに相互効果をなすプロセスであると考えている。Grossら[7)8)]は「育児の課題や状況を効果的に調整すること、あるいはマネージメントすることができるという母親の捉え」として定義づけ、Ruchalaら[9)]は「母親への適応や、母親としての子どもへの世話に重要な影響を与えるもの」として定義づけている。Maternal Confidenceは、母親の認知的過程、動機付け、情緒的過程、選択に影響を与えるとともに、母親としての「できる」といった主観的な捉えを重視している。このようにBanduraの理論によれば、母親自身が親としての課題や状況を有効に調整、達成することができると自信をもつことであり、母親の主観的な捉えが母親の行動を予測する重要な要因となっている。また、Maternal Confidenceの構成概念としては【子どもとの生活に関する知識】【子どもとの生活に関する行動】【育児に関するマネージメント】【子どもの理解に関する感受性】【子どもの健康の保持・増進】の５つが抽出されている[4)5)]。

２．低出生体重児を抱える母親のMaternal Confidence

低出生体重児の母親は、成熟児を抱える母親よりMaternal Confidenceは低く、早産といった予期せぬ体験を通してConfidenceは低い傾向にある[6)~8)]。中島[12)]は、NICU入院を経験した子を育てる母親の心理特性について、わが子との生活や身体的な接触に非常に強い欲求がある一方で、初期に子に対する認識や子との関係性の中の母親役割に自信のなさを抱いていることを報告している。また、原田[13)]は、極低出生体重児の「母親としての自信」に関する退院までの経時変化について、経産婦であること、周囲のサポートがあるケースでは初期より高いが、児の啼泣場面等、状況に応じて自信は低くなると報告している。

また、池内[14)]は、低出生体重児をもつ母親のとまどいの思いの変化として、後ろ向きの物語は前向きな物語に助けられ［母親の児の受け入れ］［母親の子どもからの学び］へと進んでおり［子どもが生きている］と感じることで母親は母と子の絆が形成され［母親の児の受け入れ］へと進み、母親としての自信をもつことで母親は子どもの立場に立った視座がもて［母親の子どもからの学び］を得、子どもの成長を見守るという母親の前向きな思いへと過程をたどっていくと述べている。母親の前向きな思いへの変化の根底にMaternal Confidenceは大きく関連し影響しているといえる。

Ⅲ．低出生体重児を抱える母親の体験

低出生体重児を抱える母親は、イメージした妊娠・出産・育児とは異なり、喪失感、自責の念など複雑な心理過程をたどりつつ母親としての体験を重ねていく[15)]。表１に示した低出生体重児を抱える母親の体験より特徴が５つ抽出された。

表１　低出生体重児を抱える母親の体験に関する文献

著　者	テーマ	対象者	体　験
田中利枝ら[15]、2014	早産児を出産した母親の母乳育児をとおした思い	在胎週数23～28週の早産児を出産した母親	[早産への自責の念]［児が順調に育ってほしい］［できるなら母乳で育てたい］［母乳を与えられる自己像への接近］［母親として成長したい］［母乳育児が思うようにいかないもどかしさ］［児の成長を願うがためのゆらぎ］［医療者に支えられ前向きになる］
亀山千里ら[23]、2013	直接授乳困難に陥っている低出生体重児を出産した母親の母乳育児に対する気持ち	NICU入室中の児を抱える母親	［母乳育児をしたい］［直接授乳は自然とできるものではない］［母乳分泌が少ないと母乳育児はうまくゆかない］［周囲が気持ちを受け入れてくれない］［直接授乳困難な状況を打開したい］
小林弥生ら[24]、2010	母子同室を行えず児を残し先に退院する母親の思いの変化	出産入院中に母子同室を行えず、児を残し先に退院し、産褥入院を行った母親	出産時には［児と初めて会う喜び］［児への不安・罪悪感］の児についてのみ語られており、出産から退院までは自分を取り巻く周囲の［他の母子に対する羨望・悲哀］を抱いており、自分自身について入院中から［母乳栄養希望と母乳管理への不安］を感じ、児を残して退院する際には[退院後の生活について不安］を感じていた
池内和代ら[14]、2009	超低出生体重児を持つ母親のナラティブ（語り）	超低出生体重児を育てている母親	前向きな物語：[子どもが生きている］［母親と周囲との良好なつながり］［母親の児の受け入れ］［母親の子どもからの学び］、後ろ向きの物語：[母親の自責］［母親の思いを周囲には理解してもらえない］［子どもの不確かさ］
石田貴子ら[25]、2008	早産で超・極低出生体重児を持つ親のNICU入院中における戸惑い	NICUに入院になった親	入院当初：[知らない世界］［はかないわが子］［なにもできない自分］、面会を重ねて：[まともに育つのか］［目が離れたのではないか］、退院時：[家に帰っても大丈夫］
弘田景子ら[22]、2007	低出生体重児を出産した母親の経験	低出生体重児を帝王切開で出産した母親	［早期産に対する思い］［出産後の寂しさ］［抱っこをしたいと望む思い］
山崎美幸ら[26]、2006	早産・低出生体重児を持つ母親が抱く育児不安と対処行動	在胎週数30～33週までの低出生体重児を持つ母親	［将来への不安］［同胞との関係性］［育児行動上の困惑］［葛藤］［余裕のなさ］［育児支援者との関係性］
佐東美緒[19] 2005	NICUを退院した子どもを育てる両親の育児への思いと育児支援の方向性	在胎週数29～33週までの低出生体重児をもつ両親	入院中：[「助かるだろうか」という生命維持への不安］［子どもが「小さいこと」で生じる不安］［母乳へ託した子どもへの償いの思い］［ケアを通して感じる育児への手応えと不安］［子どもの１日の様子が伝わる安堵感］、退院直前：[子どもの発する信号が読めない不安］［子どもが退院したことによる同胞への対応の苦慮］［よく眠る子どもへの安堵］［予想外の育てやすさ］、現在：[「小さく生まれた」ことからくる身体の弱さ、成長・発達への不安］［相談する場所がないことによる孤独感］［未経験からくる育児へのとまどい］［子どもが育つことに感じる育児への自信］［将来像を描ける安心感］［家庭支援から得る育児への勇気］
小林孝子ら[27]、2004	低出生体重児で出生した学齢期の子どもをもつ母親の心理的適応	学齢期に達した低出生体重児の母親	［親として存在する］［人として成長する］［小さく生まれたことの意味づけをする］
近藤祐子ら[20]、2004	低出生体重児の母親の思いの変化	低出生体重児の母親	保育器期：[児の姿・はかなさに対するショック］など、コット期：[ほっとした気持ち］［育児参加の感動］、退院時：[退院の喜び］［とりあえず安心］など、全期間：[成長発達への願い］［成長発達の遅れ・後遺症の可能性の心配］
西海真理ら[28]、2000	NICUに入院した低出生体重児の母親が児との関係性を育む過程	NICU入院中の低出生体重児の母親	［わたしの子とわたし:二人の関係性を育てる］［懸命に生きている子とそれを見ているわたし］［育つこの子とこの子に認められるわたし］［確かなこの子とこの子の世話ができるわたし］［ともに生きている:一体感］

１．低出生体重児の出産・育児といった予期せぬ体験

低出生体重児を抱える母親は、妊娠中、緊急または予定より早い時期での入院により戸惑い不安を抱えている[16]。予想外の入院、母体搬送への不安、予想外の出産への不安とともに、早産の不安・苦悩・戸惑い・混乱[17] といった体験をする。「まさかこんなに早いとは」「どうなるんだろう」といった〈早い週数での緊急帝王切開の決定に対する不安や出産の覚悟〉、〈早い週数での出産開始に対する驚きや不安〉を感じている[18]。一方、これらの予期せぬ体験に対して〈早期産を意識したことに関連して医療に頼った苦悩や安堵感〉として、大きい病院に行けば大丈夫」「そんなに不安はなかった」、「もうこれで産んでも大丈夫」と安心感があった、「NICUがあって小児科医師もいたのでそれほど心配やショックではなかった」といった周産期医療体制が整っている認知が安心感につながっているケースも報告されており[18]、児の状況、体験の認知によりこれらの予期せぬ体験の捉えは異なっていた。

２．母親の自責・罪悪感

低出生体重児を抱える母親は、この予期せぬ体験を通して、自らの自責の念、罪悪感を抱いていた。母親としての自責は、「もっと早く気づいてあげれば」「もう少し安静にしていれば」といった突然の入院や早産・帝王切開の体験から超低出生体重児を産んでしまったことを悔やみ、喪失感や罪悪感という思いを抱いている[14]。この母親の自責には〈仕事や生活での無理を悔やむ思い〉〈上の子に母親役割が果たせない思い〉〈ふつうの出産ができなかった喪失感〉〈母親としての自信のない思い〉が含まれており[14]、〈早産への後悔〉や、子どもに申し訳ないといった〈子どもへの謝罪〉[17]といった思いをもっていた。これらの母親としての自責の念は、子どもを育て、子どもが成長・発達していくことで軽減されていくが、育児を行う中で継続して残っており、幾度となく想起されていた[14]。低出生体重時を抱える母親は、出産後早期のみではなく、母親としての自責・罪悪感を常に抱えながら育児に望んでいるといえる。

３．子どもの不確かさ

低出生体重児を抱える母親は、児の未熟性、児の生命、成長に関する不安を抱えている。妊娠中から出産・育児を通して〈早産の不安と恐怖の思い〉〈お腹の子に実感がわかない思い〉、〈子どもを一人で育てる不安な思い〉〈子どもの成長・発達・病気に対する思い〉〈子どもが普通に育たない可能性への不安と悲嘆な思い〉[14]を抱いている。子どもが育つ過程で軽減・消失するものもあるが、母親の妊娠中から現在に至るまで子どもの命の不安定な思いや成長・発達・病気に対する思いは継続しており、今後も持ち続けていく思いであった[14]。母親は、出生直後は「助かるだろうか」といった〈生命維持への不安〉を抱いており[19]、「思っていたより小さくて・・涙がとまらない」といった〈児の姿・はかなさに対するショック〉や〈何があってもおかしくない状態〉に不安を感じ〈先の見えない不安〉を抱いていた[20]。また、生命の危機から脱した後も〈小さく生まれたことからくる身体の弱さ、成長・発達への不安〉をもっていた[20]。このように低出生体重児を抱える母親は、児の特徴と関連して健康に関する不確かさを常に抱えており、不安に感じ、気がかりをもちながら育児を行っていると言える。

４．子どもの成長への喜び

一方、低体重児を抱える母親は正常児と比べて、育児に対する感情として「安心」は、有意に低いが「楽しみ」は有意に高く、母親は育児に対して不安を感じつつも、成長を楽しみを感じることができている[21]。母親は、出生直後からの経過をたどる中で、児が「目にみえて成長しているのがわかる」「赤ちゃんらしくなった」「大きくなってうれしい」といった〈成長発達の実感と喜び〉[20]を感じており、子どもの不確かな状況がある一方で、順調に成長していくわが子をみて安心し、実感して成長を楽しみにすることができている。妊娠中より〈胎動を感じた思い〉〈元気で無事に生まれてきてくれた思い〉〈とりあえず助かった思い〉〈子どもの状態が徐々に良くなっていくことで子どもの生きる力を実感する思い〉〈子どもに会う・触れることで子どもを実感する思い〉〈子どもが順調

に育ってくれている思い〉を母親は抱いており、低出生体重で生まれた児の健康に関する気がかりを抱えている母親にとって、児の成長の実感は、大きな楽しみ、喜びとなっている。

5．アンビバレントな母親の思い

低出生体重児を抱える母親は、上記、低出生体重児を出産したといった自責の念を感じながら、児の健康に関する不安、子どもの不確かさ等のnegativeな思いを抱えながらも、子どもが生きていること、また、日々の成長の楽しみといったpositiveな思いも抱いており、これらの思いの中、常に葛藤し[22]、ゆらぎながらその思いをたどっている。母親は〈自責の念〉を抱えながらも〈児が順調に育ってほしい〉と願い、その過程で〈母親として成長したい〉と〈母乳育児が思うようにいかないもどかしさ〉や〈児の成長を願うがためのゆらぎ〉があり、そして、〈医療者に支えられ前向きにな（る）〉りながら、児の状況に応じてゆらぎ、その過程をたどっていた[15]。児の退院時では、〈児との生活への喜び〉といった子どものいる生活に期待と喜びを感じつつも〈退院後の生活に関する不安〉を抱えており[17]、アンビバレントな感情を持ち、ゆらいでいることも低出生体重児を抱える母親の特徴の一つであるといえる。

Ⅳ．低出生体重児を抱える母親の Maternal Confidenceの特徴と看護介入

Maternal Confidenceの各局面にみる特徴と看護介入について文献上明らかになったことを下記に論じていく。

1．【子どもの健康の保持・増進】の特徴と看護介入

【子どもの健康の保持・増進】の現状について、低出生体重児を抱える母親は、児の成長・発達に関する不安を抱えており[2]、児の入院時から母親は「障がいなく大きくなるか」「心身ともに発達するか」など、児の大きさ、児の体重増加、成長・発達の遅れといった子どもの健康・成長・発達の側面について気がかりを抱えている[25]。また、子どもにたくさんの機器がついていたことや点滴、保育器、人工呼吸器、吸引等といった児への生命維持に関する処置に関連したストレスを抱いており[29]、児の置かれている治療・看護に関して不安をもっておりMaternal Confidenceは低い状況にあるといえる。

これら【子どもの健康の保持・増進】を高める看護介入として多くの介入が報告されている。低出生体重児は、早産に関連して、呼吸運動、体温調整の調整機構の未熟性等の特徴をもっており、胎外生活への適応に向けた高度な医療の提供、ケアが望まれ、NICU入院中の児に対するケア全般が、子どもの健康の保持・増進を高めていく看護につながっていく。また、子どもの入院中、母親は「自分の気持ちや不安を聞いてほしい」「家族に対しての助言」などの支援を希望しており[30]、母親のニーズを理解し対応していく支援もまた重要である。出生後早期より、継続して児の健康に関して［子どもの医療に携わる者からの出生直後からの情報提供］や［小さい子ども独自の成長・発達過程の提示］[19]等の情報提供が大切である。それと同時に、［児が無事に成長していることを感じられることができるようする］［退院時の児の成長や身体症状を把握し、無事に退院できることを理解できるようにする］［無呼吸発作の対応ができるようにする］というように、母親が児の健康について理解し、判断・対応できるための支援は重要である。子どもの成長の変化を共に共有しながら、徐々に母親自ら理解・判断できていくことがMaternal Confidenceにつながっていく。また、NICUを退院した児への継続看護に関して［NICUにおける退院直後の相談機能の充実］［状況に合わせた地域ケア活用方法の説明と連携］［母乳相談資源を活用しやすくする説明と連携］［専門性の高い個別的アドバイスの継続］が[31]、退院後も絶え間なく、子どもの状況変化に関する対処や、家庭で育児を行う中での疑問・不安の解決につながっていくのであり、継続した看護支援が、Maternal Confidenceを高める支援として重要である。

このように【子どもの健康の保持・増進】の局面を高める看護介入として、(1) 低出生体重児への日々のケア、(2) 母親のニーズの把握と充足、(3) 専門性の高い個別的な情報提供・ア

ドバイス、(4) 母親が児の成長を理解・判断し対応できるための支援、(5) 連携による継続した看護支援が重要であるといえる。

２．【子どもとの生活に関する知識】の特徴と看護介入

低出生体重児の母親は、退院後の生活に関する知識について不安を抱えている。渡部[28]は極低出生体重児を抱える母親の退院後の希望する支援として「育児知識の提供」(53.6％) を報告している。低出生体重児の母親は、たとえどんなによい状態で退院に至っても、家に帰るときは不安と恐れをもっており[32]、「退院後必要な物品や手続き」など細やかな退院後の生活をイメージできるような子どもとの生活に関する知識への看護介入が重要である[32]。また、母親は、低出生体重児に関連した養育医療制度についてわからず、知識の提供を求めている[16]。低出生体重児を出産した母親にとって、経済的な援助である［保健医療サービスを利用できるための支援］として、知識提供も重要な支援である。

このように、【子どもとの生活に関する知識】を高めるための看護介入として、(1) 退院後の生活をイメージできるより具体的な知識の提供、(2) 保健医療サービス利用に関する知識の提供の支援が重要である。

３．【子どもとの生活に関する行動】の特徴と看護介入

【子どもとの生活に関する行動】の現状についても報告されている。例えば、低出生体重児を抱える母親は、［おむつ交換］［沐浴］［授乳］等の育児技術に関する不安が高いと報告されている[32]。また、矢野[34]は低出生体重児を出産し退院後３～４ヶ月の母親の育児行動と成熟児の育児行動に関する研究において、低出生体重児の母親の「抱く」育児行動が有意に高かったことを報告している。「抱く」行動について成熟児の母親群は頻回に抱く、抱かないに関わらず母親はイライラしている状況や授乳のスムーズさは一定であるが、低出生体重児の母親群は、よく抱いている母親のほうが、イライラしており、授乳がスムーズでない。抱く理由としても「抱かないと泣くから」が最も多く報告されている。Barnard[35]も低出生体重児の母親のほうが子どもの動作による合図に対して敏感でなく、児も合図をはっきり示さず、反応も乏しく、そのため、母親のほうが動作は活発になると報告している。Field[35]も低出生体重児の母親のほうが盛んに働きかけているにもかかわらず、児は、あまりその働きかけに対して反応がないことを示している。低出生体重児を抱える母親は、児の反応の未熟さに対応しながら、児との相互作用の中、育児行動をとってはいるが、とまどいながら育児をしており、育児行動に関するMaternal Confidenceは低い傾向にあるといえる。

これら【子どもとの生活に関する行動】を高める看護介入として多くの介入が報告されている。子どもとの生活に関する具体的な行動として、児に触れさせることや抱き方、哺乳方法等の技術の具体的な提示、また母親が実際に体験できるような支援が重要である。［母親の育児行為の拡がりを支える援助］として「育児行為の開始時期を判断し」「寄り添って指導」を行いながら「乳房ケアなど母親に対する具体的支援」を継続して支援していく[36]。母親が児の状態に応じて、育児行動を拡大できるように、常によりそいながら支援をおこなっていくことがMaternal Confidenceの高まりにつながっていくのであり、母親のプロセスにそったステップをふみながらの支援が望まれる。このように、児の病状の安定期から退院準備期のケアにおいて、常に母親を見守り、できていることを確認し、言葉で伝え、承認する関わり支援により母親は徐々に自信をもちMaternal Confidenceの高まりにつながっていく[37]。母親の心情を理解した上で、母親が成功体験を多く積みかさねることができるように支援するとともに、できていることの承認をおこなっていくことが根底として重要な看護支援であるといえる。

このように【子どもとの生活に関する行動】の局面を高める看護介入として、(1) 具体的な育児技術の提示・支援、(2) 母親の育児行動の広がりを支える支援、(3) 母親の主体的な育児行動を尊重した支援、(4) 見守り・承認が重要であるといえる。

4．【子どもの理解に関する感受性】の特徴と看護介入

低出生体重児は、神経行動的発達が未熟なために十分な合図が送れず、母親はそれを読み取ることが難しく、相互関係が成り立ちにくいと言われている[13]。原田ら[13]の極低出生体重児の母親の愛着形成過程における研究においても「子どもの特徴」「反応・合図の認知」の得点は最も低い結果であった。低出生体重児は行動の組織化が未熟であるために母親に十分な合図を送ることや、それを母親が読み取ることは困難であると報告されており、子どもの理解に関する感受性は困難であるといえる。

これら【子どもの理解に関する感受性】を高める看護介入は重要であり、愛着を高めながらの介入が報告されている。母親と児との関わりへの促進として［母乳育児にむけた働きかけ］［タッチケアへの積極的な働きかけ］［カンガルーケアへの働きかけ］[38]を、［慎重にタイミングを計って母親に声をかけ］［段階的に勧める］ことが重要である[36]。また、子どもの様子を伝える支援として［子どもの日々の変化や状態を話す］［24時間の子どもの様子を話す］［子どもの日々の変化や状態をノートに記録する］［交換日記］［子どもの状態のわかりやすい説明］といった支援[38]を通して母親は子どもの日々の様子がわかり、Maternal Confidenceの高まりにつながっていく。児の動きを言葉で表現し伝えるとともに、児の動きの意味づけや、低出生体重児の特徴について、児の成長を考慮した説明的介入を積極的に行っていくことが、母親の児の理解につながっていく。子どもの様子を具体的に伝えていく中で、低出生体重児と未熟性を考慮した時の理解が促進される。

このように【子どもの理解に関する感受性】の局面を高める看護介入として、(1) 児との相互作用の促進、(2) 子どもの様子を伝える、(3) 低出生体重児の特徴をふまえた個別の理解の促進が重要であるといえる。

5．【子どもとの生活に関するマネージメント】の特徴と看護介入

山崎[26]は、低出生体重児をもつ母親の対処行動として、「情動制御型対処行動」「問題中心型対処行動」の２つを抽出している。「情動制御型対処行動」には［気分転換］［友人との会話］等が含んでおり、また「問題中心型対処行動」では［児の生活パターンに合わせる］［サポートを得て問題解決］など児の状況に合わせた生活調整や、他者からの情緒的な支援や実際的な援助を得て問題解決しようとする対マネージメントの側面が報告されている。また、堀[29]は低出生体重児の母親の対処行動として、全員が積極的にストレスに取り組む問題志向的対処行動をしており、ストレスを最も多く感じていた母親が、数多くの対処行動をとっていたと報告している。また、対処行動として全ての母親が行っていたのが父親と相談するということであり、その次に看護師が相談相手として報告されていた。このように、低出生体重児を抱える母親は、育児におけるストレスを多く抱えながらも、積極的にマネージメントを取り入れている。

これら【子どもとの生活に関するマネージメント】を高める看護介入として、母親が低出生体重児を抱えながら、生活をマネージメントできていく看護介入が望まれる。低出生体重児の母親は、夜泣き等で困った体験があるにも関わらず、相談の電話ができなかったりと、医学的なことや疾患に関わることは電話しやすいが、生命に直結しないことは相談することにためらいがあり[32]、十分に自らの思いを表出できないでいる。常に母親の話をゆっくり聞くことに注目し、母親が感情を表出し見つめ直すことで、母親自身で癒し、問題を解決することができる[39]ことを通して、成功体験となるように、自らの捉えをマネージメントできるように支援することがMaternal Confidenceの高まりにつながっていく。また、出産後早期における［母体の十分な休養と回復を促す］支援も、母親の身体への援助として重要である。母親が退院後、［母親が児への面会にこれるか把握する］、［母親の気持ちを理解している家族がいるか把握する］といった母親の育児をサポートする養育環境についても理解し、調整していく支援[16]が重要である。

このように【子どもとの生活に関するマネージメント】の局面を高める看護介入として、(1) 母親の感情表出の促進、(2) 母親の心身の

回復支援、(3) 母親の育児をサポートする養育環境の調整が重要であるといえる。

Ⅴ．結　　論

本研究では、低出生体重児を抱える母親のMaternal Confidenceおよび看護介入に関して医学中央雑誌およびCINAHLを用いて文献検討をおこなった。

低出生体重児を抱える母親は、予期せぬ体験を通して自らの自責の念、罪悪感を抱いていた。また、子どもの不確かさを抱いている一方で、順調に成長していくわが子をみて安心し、実感して成長を楽しみにすることができており、これらアンビバレントな感情を抱いているといった特徴がみられた。また、Maternal Confidenceを高めていくための看護介入も展開されているが、より積極的に効果的に介入するためには、以下のことを提案する。

１．【子どもの健康の保持・増進】を高める看護介入：１)子どもの健康の保持・増進への直接的な働きかけ、２)母親のニーズの把握と充足、３)専門性の高い個別的な情報提供・アドバイス、４)母親が児の成長を理解・判断し対応できるための支援、５)連携による継続した看護支援

２．【子どもとの生活に関する知識】を高める看護介入：１)退院後の生活をイメージできるより具体的な知識の提供、２)保健医療サービス利用に関する知識の提供の支援

３．【子どもとの生活に関する行動】の局面を高める看護介入：１)具体的な育児技術の提示・支援、２)母親の育児行動の広がりを支える支援、３)母親の主体的な育児行動を尊重した支援、４)見守り・承認

４．【子どもの理解に関する感受性】の局面を高める看護介入：１)児との相互作用の促進、２)子どもの様子を伝える、３)低出生体重児の特徴をふまえた個別の理解の促進

５．【子どもとの生活に関するマネージメント】の局面を高める看護介入：１)母親の感情表出の促進、２)母親の心身の回復支援、３)母親の育児をサポートする養育環境の調整

今後、更に低出生体重児を抱える母親の特徴に応じ、具体的で広く活用できるMaternal Confidenceを高める看護介入の開発が望まれる。

＜引用・参考文献＞

１）国民衛生の動向・厚生の指標　増刊：厚生労働統計協会、62(9)、62、2015.

２）横田 妙子、佐々木 睦子、 内藤 直子：低出生体重児をもつ母親の抑うつと育児困難感の推移と関連、香川大学看護学雑誌、18(1)、25-34、2014.

３）茂本咲子、奈良間美保：早産で出生した乳児の母親の育児困難感の特徴と関連要因 正期産児の母親との比較より、日本小児看護学会誌、20(3)、28-35、2011.

４）岩﨑順子、野嶋佐由美：乳児を抱える母親のMaternal　ConfidenceおよびMaternal Confidenceを育成する看護介入に関する文献検討、高知女子大学看護学会誌、40(2)、125-131、2015. 06

５）岩崎順子、野嶋佐由美：妊娠期の母親のMaternal　Confidenceを育成する看護介入プログラムの開発、高知女子大学看護学会誌、41(1)、52-62、2015. 12

６）Mercer,R,,T & Ferketich,S,L：Experienced and Inexperienced Mother's Maternal Competence During Infancy. Research in Nursing & Health, 18, 333-343, 1995.

７）Zhar,L, ： The Relationship between Maternal Confidence and Mother-Infant Behaviors in Premature Infants. Research in Nursing & Health, 14, 279-286, 1991.

８）Zhar,L：The Confidence of Latina Mothers in the Care of Their Low Bitrh Weight Infants. Research in Nursing & Health, 16, 335-342, 1993.

９）Gross.D. Rocissano,L & Roncoli,M ： Maternal Confidence during toddlerhood, Comparing preterm and fullterm groups, Research in Nursing & Health.12-19,1989.

10）Gross,D & Tucker,S：Parenting Cofidence During Toddlerhood, Nurse Practitioner25, 29-34, 1994.

11）Ruchala PL： Social support, knowledge

of infant development, and Maternal Confidence among adolescent and adult mothers.JOGNN: Journal of Obstetric, Gynecologic & Neonatal Nursing, 26(6), 685-689, 1997.
12) 中島俊思：NICU入院を経験した子を育てる母親の心理特性に関する研究、九州大学心理学研究、10、207-216、2009.
13) 原田真由美：極低出生体重児の母親の愛着形成過程とその関連要因、日本新生児看護学会誌、8(1)、20-31、2001.
14) 池内和代、内藤直子：超低出生体重児を持つ母親のナラティブ（語り）と母親に対するケア、香川大学看護学雑誌、13(1)、43-54、2009.
15) 田中利枝、永見桂子、盆野元紀他：早産児を出産した母親の母乳育児をとおした思い、母性衛生、55(1)、172-181、2014.
16) 大井靖子：低出生体重児の出生時から退院後における保健師と医療機関との連携による育児支援の検討、岐阜県立看護大学紀要、14(1)、97-108、2014.
17) 藤野百合、中山美由紀：新生児集中治療室（NICU）に入院した子どもをもつ母親の思いに関するメタ統合、大阪府立大学看護学部紀要、17(1)、65-75、2011.
18) 須藤久実、平川君江、掘込和代、他：早期産で低出生体重児を出産した母親の出産体験の意味化に関する研究、The Kitakanto Medical Journal、62(2)、185-197、2012.
19) 佐東 美緒：NICUを退院した子どもを育てる両親の育児への思いと育児支援の方向性、高知女子大学紀要（看護学部編）、54、13-26、2005.
20) 近藤 祐子、角井 直美、大宮 加代子他：低出生体重児の母親の思いの変化とタイプ NICU退院までの状態や成長発達への思いに焦点をあてて、日本看護学会論文集: 小児看護、35、59-61、2005.
21) 鈴木 康江、前田 隆子、遠藤 有里：出生時体重が母親の育児に及ぼす影響　0～12歳児を持つ保護者への調査、米子医学雑誌、61(3)、93-99、2010.
22) 弘田景子、福原可央：低出生体重児を出産した母親の経験、日本看護学会論文集: 小児看護、37、80-82、2007.
23) 亀山千里、トーマス京子、 門間智子他：直接授乳困難に陥っている低出生体重児を出産した母親の母乳育児に対する気持ち、日本看護学会論文集: 小児看護、43、118-121、2013.
24) 小林弥生：母子同室を行えず児を残し先に退院する母親の思いの変化　出産から産褥入院、児の退院後１週間までに接して、日本看護学会論文集: 母性看護、40、54-56、2010.
25) 石田貴子、板井かおり、大崎和世他：早産で超・極低出生体重児を持つ親のNICU入院中における戸惑い、国立高知病院医学雑誌、16、57-62、2008.
26) 山崎美幸、高見育世、谷本由香他：早産・低出生体重児を持つ母親が抱く育児不安と対処行動　退院早期に焦点をあてて、国立高知病院医学雑誌、14-15、67-75、2007.
27) 小林孝子、土居洋子、 上原ます子：大阪府立看護大学看護学部紀要、10(1)、7-14、2004.
28) 西海真理：NICUに入院した低出生体重児の母親が児との関係性を育む過程、日本新生児看護学会講演集10回、46-47、2000.
29) 堀妙子：NICUに入院している低出生体重児の母親のストレスとその対処について、日本新生児看護学会誌、7(1)、33-41、2000.
30) 渡部朋、白畑範子、田村晃他：極低出生体重児出生の現状と支援に関する研究、岩手県立大学看護学部紀要、8、19-29、2006.
31) 中澤貴代：NICU退院児の継続看護に対するニーズの検討　政令指定都市Ａ市に在住する母親へのインタビューより、日本新生児看護学会誌、14(2)、15-23、2008.
32) 田中美樹：NICU退院児と母親への継続的育児支援に関する研究、日本新生児看護学会誌、13(1)、15-21、2006.
33) 石田直美、川邊喜美、米田佳代他：低出生体重児の親の育児不安に関する文献研究、兵庫県母性衛生学会雑誌、15、80-86、2006.
34) 矢野美紀：乳児期における母親の育児行動

に関する研究　低出生体重児を出産した母親と成熟児を出産した母親の比較、母性衛生、45(2)、218-232、2004.
35) Klaus,M.H.、Kennell,J.H.：Parent Infant Bonding　親と子のきずな、医学書院、1991.
36) 藤本栄子、城島哲子、宮谷恵他：極低出生体重児の母子関係と看護援助、日本新生児看護学会誌、6(1)、16-24、1999.
37) 澤田理菜：早産・極低出生体重児を修正した母親が育児に対して自信をもつための関わり、川崎市立川崎病院事例研究集録14回、56-58、2012.
38) 南雲史代、村井文江、江守陽子：低出生体重児を持つ母親の心の支えとなったNICU看護師の関わり　母親による自由記述からの内容分析、茨城県母性衛生学会誌、30、16-22、2012.
39) 齋藤和恵：極低出生体重児の乳児期における発達的特徴と育児支援について　第１報、小児保健研究、58(4)、487-500、1999.
40) 山口咲奈枝、遠藤由美子：低出生体重児をもつ母親と成熟児をもつ母親の育児不安の比較　児の退院時および退院後１ヵ月時の調査、母性衛生、5(2)、318-324、2009.
41) 間野雅子、土取洋子：NICU退院後のハイリスク児と母親への継続ケアに関する研究－退院後３日目の電話訪問を試みて－、小児保健研究、60(5)、662-670、2001.
42) 飯田美代子、國分真佐代、鈴木静：低出生体重児の育児における日記の有用性、愛知医科大学看護学部紀要、7、31-38、2008
43) Hyo-Sin Choil, Yeong-Hee Shin：Effects on Maternal Attachment, Parenting Stress, and Maternal Confidence of Systematic Information for Mothers of Premature Infants, Child Health Nursing Research, 19(3), 207-215, 2013.
44) Shwu-Jiuan Shieh, Hsiu-Lin Chen, Fen-Chen Liu,else：The effectiveness of structured discharge education on Maternal Confidence, caring knowledge and growth of premature newborns, Journal of Clinical Nursing, 19, 3307-3313, 2010.
45) 南雲史代、村井文江、江守陽子：低出生体重児を持つ母親の育児に対する自信に関連する要因の検討　レジリエンスに焦点をあてて、小児保健研究、72(4)、500-507、2013.
46) 田中克枝、鈴木千衣、古溝陽子：ハイリスク児をもつ母親の育児ストレスと育児支援の検討　NICU退院後１年以上経過した早期産低出生体重児について、弘前医療福祉大学紀要、2(1)、39-45、2011.
47) 北村亜希子：低出生体重児の母親の期待感・予期不安感と子ども統制不能感に影響する因子の検討　子どもがNICU入院中と退院後の比較、日本新生児看護学会誌、17(1)、2-10、2011.
48) 田中美樹、佐藤香代：NICU退院児と母親に対する育児支援に関する研究　NICU看護師のインタビューを通して(第１報)、福岡県立大学看護学研究紀要、4(1)、28-34、2007.